

太地の鯨漁

南紀の太地町を訪ねました。江戸時代初期に、組織的捕鯨を開始した場所です。明治時代初期まで、網取り式の漁をしていました。また、近代捕鯨においては、南氷洋の捕鯨船の砲手を輩出しました。現在も小型（体長5メートルほどのゴンドウクジラが中心）の捕鯨が行われています。鯨供養碑や鯨骨の鳥居、たくさんの鯨料理店などがあり、スーパーでは、鯨のさまざまな部位が販売されています。くじら博物館もあり、生活と鯨が密着している地域です。

鯨漁を行う鯨組は大規模組織です。長崎県生月島の益富組の例では、最盛期には38艘の船、500人ほどの組織だったそうです。太地も400人規模だったと記憶しています。

鯨組は経営主のもとに、陸上部隊と海上部隊に分かれます。陸上は、回遊する鯨を岬で見つけ、船に知らせる「山見」、解体などを行う「納屋方」に分かれます。海上は、勢子船（鯨を追い込む）や網船（鯨に網をかける）が刃刺と呼ばれる頭領の指揮の下で働きます。

海上の部隊は沖合で待機。山見が鯨を見つけると狼煙を上げ、船が動きます。勢子船が鯨を網に追い込み、刃刺が鉞を打ち込みます。徐々に太い鉞を打ち込み、鯨を弱らせます。最後は刃刺が鼻先に縄をかけます。鯨が海に沈まないようにするためです。それを2艘の船で挟み、網ごと浜に運んで解体します。



▲鉞を投げる刃刺像

鯨は無駄なく利用されます。鯨油、食料はもとより、文楽人形のバネとして鯨のひげが使われたりもします。

江戸時代の後半、数多くのアメリカの捕鯨船が日本近海で操業します。鯨油が目的です。長期の航海を行い、鯨油を船で生産していました。ペリーが開港を求めたのは、捕鯨船の補給のためです。その影響で、太地では鯨が捕れなくなりました。不漁に焦った太地の鯨組は、明治の初期に111人が死亡する事故を起こし、それ以降は衰退したそうです。

太地のイルカ追い込み漁が残酷だと批判をする動物愛護団体もあります。鯨の捕獲への国際的な眼も、厳しいものがあります。しかし、太地に行くと、生活文化の多様性を認める大切さを感じます。

(MBO実践支援センター代表 大阪商業大学特任教授)

